

弥栄小学校運営支援協議会 会議録

- 1 会議名 令和7年度第2回弥栄小学校学校運営支援協議会
- 2 開催日時 令和7年9月17日(水)午後3時00分から午後4時15分まで
- 3 開催場所 一関市立弥栄小学校 校長室
- 4 出席者
 - (1) 委員 熊谷佳美(会長)、小山洋子(真滝幼稚園長)、菅原達信(PTA 副会長)
中村美佐(副会長)、熊谷利春
 - (2) 事務局 熊谷利春(副校長)
- 5 議題
 - (1) 1学期まなびフェストアンケート学校評価結果について
 - (2) 学校支援活動の推進について
 - (3) 弥栄っ子に望む姿について
 - (4) その他
- 6 公開、非公開の別 公開
- 7 傍聴者 0人
- 8 協議内容等
 - (1) 1学期まなびフェストアンケート学校評価結果について
校長から、資料2～7ページに基づき、アンケート結果と、検証改善の取組について説明した。
校長 集計し分析した結果から「読書を含めた学習時間」「自ら考え自ら行動するPDCAサイクルの構築」「メディアコントロール」の3点が課題として明らかになった。
また、カウンセラーが欲しいという要望があった。これについては、新採用の養護教諭が大学で心理学やカウンセリングを学んだという経緯があり、養護教諭をカウンセラーとした「ぼかぼかタイム」を設けた。また、教員を増やして欲しいという要望もあったが、これは定数があるので難しい。
 - (2) 学校支援活動の推進について
事務局から、資料8～10ページに基づき、メディア利用の実態や新たに始めた学校支援活動について説明した。
事務局 市民センターの協力のもと、学校サポーターを募り、ミシン補助にご協力をいただいていた。地域連携のため、この活動を拡げていきたい。また、3校合同の「ノーメディア週間」を始めることにした。
 - (3) 弥栄っ子に望む姿について
校長から、子ども達の様子について説明した。
校長 第1回の協議では「卒業後も委縮しないように自己肯定感や自己有用感を育みたい」という課題が話し合われていた。調査の結果をみると自己肯定感や有用感が高く、自分たちや地域のよさを自覚できている。その反面、周りの大人が過保護・過干渉になっているように感じられる。先日の修学旅行で

も、最終的には守れたが、集合時間を守ることができず注意をした。また、挨拶にしても形だけで、相手を見ずに小さな声で言う姿が見られた。さらに、班別行動をしたが、教師に頼る様子が散見され、困っても聞くということができなかった。

経験をとおして自覚できれば直していける子ども達である。自分たちで考え実践していく力を高めていきたい。

ア 自ら考え自ら行動するたくましさの育成について

委員 自己決定の場を設け、自分で決める、自分で考える機会を創っていききたい。レールのないところを歩ませる冒険をさせていきたい。

事務局 10月には学習発表会という大きな行事を控えている。子ども達が直面する困難を安易に取り除くのではなく、乗り越えていくために足場やきっかけを与える伴走者としての役割を職員間で共有して取り組んでいきたいと考えている。

校長 本来、自分たちで考え自分たちで工夫していく活動というのは楽しいものである。実践していくためには、見通しをもった指導も必要であるが、その時間を確保できず難しいというのが正直なところである。あまりハードルを高く設定するのではなく、こまめに振り返りその反省を次に活かしていくというサイクルを構築していきたい。

委員 幼稚園でも経験不足ということが課題であり、直接体験を大切にしていきたいと考えている。真滝駅がすぐそばにあるのに、列車に乗ったことのある園児は一人もいなかった。そこで、列車の乗車体験を行った。いつもと違う車窓の景色からたくさんのことをみつけ、気付くことができた。

イ 滝沢小との交流活動について

委員 中学校に進学してから不登校になってしまうという話を聞いた。ぜひ、滝沢小との交流を6年生になってからだけでなく、4年生や5年生のうちからたくさん取り入れていきたい。新しい出会いが、より良い学習環境を育む、そして、多様な他者と交流したり話したりするきっかけにもなる。

事務局 これまで6年生同士の学習交流や5年生同士の自動車工場見学を行ってきた。今年度は新たに、5年生同士での北上川調査船「ゆはず」乗船体験を設けた。滝沢小とも、今後増やしていくことを確認している。

(4) その他

委員 修学旅行は、バスで運ばれるより、汽車や新幹線、地下鉄を乗り継ぎ、失敗も多かったようだが、自分で責任をもつことを感じただけでも、子ども達にとってはとてもよい勉強になったと思う。現在の子ども達は、メディアの使用時間など、たくさん守らなければならないことがある。子ども達も大変だなということを感じる。しかし、社会そのものが、それを求めている以上、子ども達を乗り越えさせ身に付けさせていかなければならない。ぜひ、遠慮せず全力で子ども達と向き合って欲しい。